ぼんぼん第四部

牧歌

今江祥智

長新太 絵

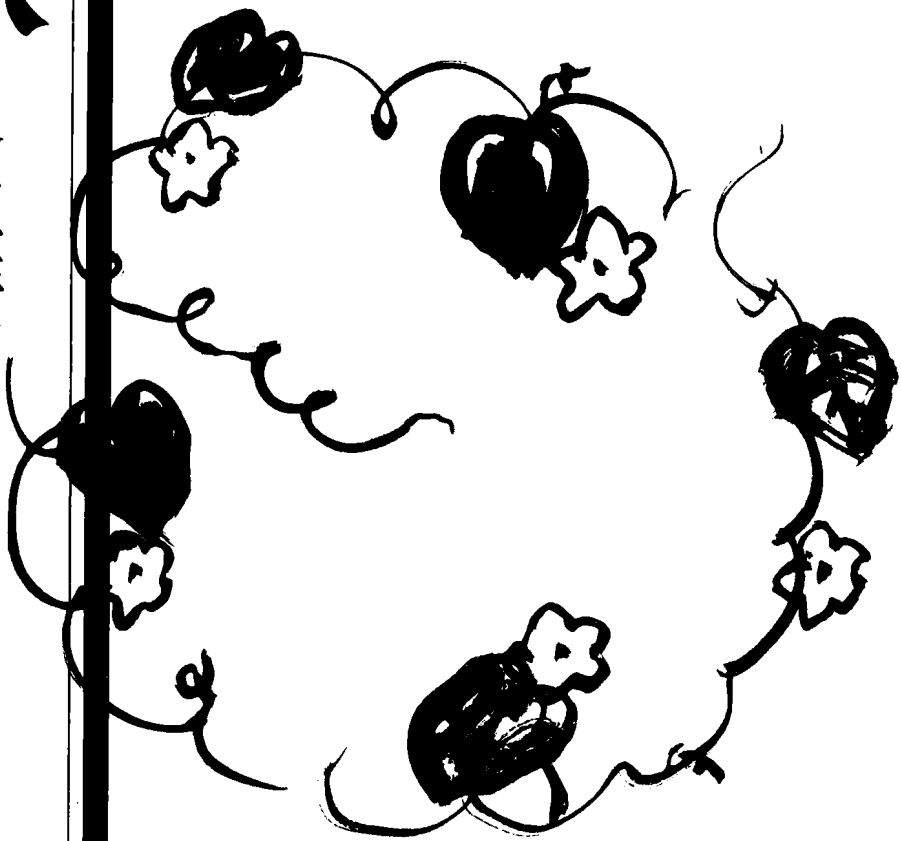
理論社

ぽんぽん第四部

牧歌

今江祥智

長新太 絵



理論社

今江祥智　京都市左京区北白川大堂町11の3

1932年大阪市に生まれる。同志社大学英文科卒業。名古屋で中学校教師，東京で編集者暮しののち京都に帰り，現在は著作に専念。少年小説「山のむこうは青い海だった」「ぼんぼん」「優しさごっこ」，エッセイ集「子どもの国からの挨拶」「絵本の新世界」など多くの著作がある。『今江祥智の本』全22巻（理論社）がある。

作者　今江祥智（いまえ・よしとも）　NDC913 A5変型 20cm 420p

画家　長　新太（ちょう・しんた）　1985年初版 ISBN4-652-01040-0

牧歌　ぼんぼん第四部　1986年6月第三刷発行

制作　小宮山量平　発行　山村光司　発行所　株式会社　理論社

住所　東京都新宿区若松町15-6　電話03(203)5791　振替口座東京9-95736

©1985 Yoshitomo Imae & Shinta Cho Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

牧歌　ぼんぼん第四部

もくじ

第一章　ひろぼん着任　5
第二章　水泳部志願　52
第三章　木ヅチに乾杯！　99
第四章　仏像を描いて　139
第五章　思いがけない夏　184

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六章　ひとつの出発　222
第七章　白い裸女たち　258
第八章　フケツシフケツシ　295
第九章　疑心暗鬼　334
第十章　もう一つの出発　371
あとがき　418

装画・さし絵　長　新太
装幀　平野甲賀

どんな時代にも、それぞれの牧歌がある……

アーウィン・ショー「その時ぼくらは三人だった」

第一章
ひろぼん着任

1

洋はわが目を疑った。

最前列の男生徒の一人が、始業時からずっと鉛筆の芯をとがらせていたのを、ぽきんと自分から折るのを見たのである。それも、一本だけではない。時間をかけてていねいにとがらせていたものを、次々に七、八本すべて折ってしまうのである。

（なにするんや。中学生にもなっとって鉛筆と遊んでたらあかんがな……）

思わずそう声にだそうとした洋の機先を制するように、その男生徒は、教壇で絶句立往生している洋にむかって、にやりと笑ったのである。その生徒の気がおかしくなったのか——と洋が一瞬思ってしまうような、奇妙にいびつな笑顔だった。その生徒の顔が、ぽっと苺いろに光ったように見えて、洋はその文句をのどもとへ押しもどした。そこであわてて、教卓の右はじにおいてある座席表に目を走らせた。その生徒は根元という名であった。気の短い教師なら、そこでただちに根元に起立をもとめ、理由を問

いただしたにちがいない。しかし、洋にとっては、根元少年のしたことがあまりにも常識はずれだったから、すぐに問いただすのがためらわれたのである。

そんな洋のためらいをよそに、根元少年はまったく何事もなかったみたいに、また最初の鉛筆にもどって、ゆっくりとその芯をとがらすことを始めた。真剣なまなざしで、まるで工作の時間に先生から仕事として言いつけられているかのように、せっせと「作業」を再開したのだ。洋は息をのみ声をのみ、うろたえてぼんやりとなった目を黒板にもどした。自分が書いた文字までいびつにゆがんで見えた。けれど、根元少年が最前列にいるために、うしろの大部分の生徒たちには、この出来事がわからず、ただ洋がなにかにおどろいて立往生したのをけげんな面持ちで見つめるだけだった。

—先生、黙っとったら授業にならんで、なんとか言うてちょうよ。

おっとりした口調で声をかけたのは、こんどは最後列に坐っている大柄な男生徒で、洋がいそいで座席表を見ると、滝井といった。

—ああ。ほんまにそうや。そやったなあ。

洋が自分に言いきかせるようにそうつぶやくのを聞いて、滝井少年は笑った。

—素直な先生、やっぱり洋(ひろ)ぼんだで。

—ヒロボン？　なんのこと？

洋が面くらって聞き返した。

—先生のあだ名。

滝井少年は、わるびれずに教えてくれた。

—……？

—ぼんは大阪のぼんぼんの略。ひろは洋先生の略、あわせて、ひろぼん……。
—なるほど……。
ようやくあだ名の由来を理解した洋に、滝井少年は註釈してくれた。
—大阪じゃぼんぼんいうたら弱虫のことぎゃあ?
—ああ。あかんたれという意味あいもふくまれてるみたいやな。
—あかんたれ……か。やっぱ、あたっとるわ。これ、できたてのほやほやのあだ名。
そのことばで二年E組一同五十三人がどっと笑い声をあげた。洋も苦笑するしかなかった。苦笑のすきまから根元少年を見ると、あいかわらず芯をとがらせながら小さく笑っていた。洋は態勢を立て直すために標準語を使うことにした。
—じゃあ、さきに説明した要領で、この花瓶のデッサンを始めて。
ぼんぼん先生はいいが、なめられてはならないと思った。正式の教員ではなくて、産休の先生のかわりに入ったものだから、よけいにそう思った。ちゃんと教員としてやっていけるところを見せれば、うまくいけば正規の教員として採用される可能性がある。このままここの学校に残れる見込みもあった。たしかにそう言ってくれた教頭の顔を思いうかべながら、洋は自分にできる限りのきりきりしゃんとした顔つきで教室中を見まわした。一拍おいて4Bの鉛筆の走る柔らかな音がひろがった。洋は、ほっと一息ついて机間巡視を始めた。それにしても一クラス五十三人とは多すぎる。少しふとった先生では机間巡視もしにくいくらい机と椅子と子どもがつまっていた。いわゆる主要五教科とちがう図工の時間はみんなも気もちが楽になるらしく、しばらくするうちにだれも、さっきの洋の立往生のことなど忘れてしまった顔になっていた。真横から根元少年に目をやると、この子だけはまだデッサンに入っていなか

った。あいかわらず鉛筆を削(けず)っていた。よっぽど、つかつかと近よっていって、

（いつまで遊んでるつもりや）

と、きいてやりたかったが、がまんした。新しい教師の前で、しかも初めての時間に、先生を無視するようなかっこうで、かたくなに鉛筆削りをつづけるには、それこそよほどのわけがあるにちがいない。責めたり叱ったりするのは、そのわけをきいてからでよいと判断したからである。そのままた教室のうしろへもどっていくと、滝井少年の横にきた。こちらはせっせと鉛筆を走らせている。かなりのうまさで花瓶のデッサンが進んでいた。

―うまいもンやないか。

と、ほめてやると、

―先生もやっぱりそう思う？

ちょっとはずんだ声で図にのるので、

―ン。ま、中学二年にしてはの話だ。

と、釘(くぎ)をさしてやった。すると、

―あれ、先生、二ケ国語しゃべれるがヤ。

うまく話題をかえられてしまった。

―どうして？

―大阪弁と標準語。

―そうかあ。それはそうや。

洋が、つられてうなずくと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

—ほんとにもう素直な先生。
ひやかすような口調で言った。
—私語はやめてくださーい。
誰かがまのびした声をあげ、女生徒が何人か忍び笑いした。洋はもう一度態勢を立て直すために教壇にもどってみんなを見おろした。五十三人もの生徒全部を見渡し、目をいきとどかせるには、やはりある高さがいるようだった。そうしながら洋は自分が気の弱いトンビになった気がしていた。トンビの目の下でカラスたち（うつむいて絵を描いている生徒たちの黒い髪からそう連想してしまった）は、めいめい好き勝手に遊んでいるように見えた。
（新任のあいさつが締まらなかったさかいやろか……）
洋は少しばかり反省していた。
—……聞けば、わたしがかわりをさせていただく佐和先生はわたしのおふくろくらいのおとしだとか。それやったら先生の息子のつもりでつきおうて下さい。いや、こんな言い方、先生に聞かれたらいやがられるかなあ。とにかくよろしゅう。
ひとりごとですませばよいところまで全部マイクの前でしゃべってしまっていた。教頭がとりなすように、
—小松先生は当地の先生としては珍しく大阪のお方だで、やっぱりちょっとかわっておられるわ。ま、大阪のぼんぼんいうとこだでなあ。
名古屋弁まるだしで説明してくれたのが、さきのあだ名のもとになったらしい。とにかく生徒たちの反応はすばやくて鋭いものがあった。産休要員として入り、受持教科は図工、担任ではなくて二年E組

の副担任――と、なにやらフロクみたいな感じの先生、おまけに若いときているから、生徒たちが新任来る――と緊張するよりも気楽に親しみをもったのもむりはなかった。あだ名がはやばやとつけられたのもそのせいにちがいない。

それは有難かったが、学校の授業はやはりなかなか気骨のおれるものだった。洋も友人のやってる小学生の画塾を手伝ったことがあったから、子どもたちの前に立つことや、絵を描かせることについては、活かせる体験があった。けれどなにかのちょうしに、百六つの目でいっせいに見つめられると、たじたじとなった。赤ん坊ほどではないが、物おじしない子どもの目の光はかなり強いもので、そいつをたった二つの目で受けとめ、ときにははね返すには、ちょっとした力が必要だった。画塾には、とにもかくにも絵を描く気もちのある子どもが集まっているのだから教える方も楽だった。学校では一教科にすぎず、図工など息抜きの時間だとまちがって考えているのもいるからやっかいなのだ。

絵を描くのが息抜きではないことを「教える」には、自分が絵を描くところを見せるしかない――と、洋は考えていた。だから、みんなが絵を描くことに集中しているあいだ、だれる前に、自分も描く仲間に入ることにした。教壇のはしに立ち、画板のひもを首にかけ、花瓶をにらみつけるようにして立ったままで描き始めた。まだ誰もそんな洋に気づかない。けれど、やがて手の早い者から一息いれたところで目をあげ、洋のようすに気がつくのが出てきた。おや……という顔で洋を見ていた一人が、

―先生も描いとるが。

と、ささやいた。

―佐和先生はぼくらの前で描かなんだがや。

―ん。ひろぼん、うまいぎゃあ。

—見にいってもおこらんぎゃあ。
ささやきがさざ波になってひろがる。洋にもその声は聞こえていたが、知らんふりで描きつづけた。一区切りつくところまでいって鉛筆をおくと、すぐうしろで声がした。
—うみゃあ。うみゃあもんだ。
ふりむくと根元少年が立ってきていた。
—ありがと。
礼を言っておいてから、根元のはどうかな？　ときいてやった。もしかしたら根元少年はずっと鉛筆削りばかりやっていて、描けてないかもしれないと案じながらきいたのだったが、すたすたと自分の席にもどると、目顔で、見てくれと誘った。洋がおそるおそる近づくと、根元少年は画用紙を指さした。白紙のままだ。
（ねもとオ、おまえ……）
のどもとまででかかったところを押さえて、どんな絵かな——ときいてやった。すると根元少年はにっと笑って、画用紙を裏返した。荒いタッチでだが、画面いっぱいに、まぎれもない花瓶の、それもかなり上手なスケッチが完成されていた。
—へええ、いつのまに……。
さすがに今度は声に出してしまった。
—ずっと鉛筆削ってたんとちごたン？
思わず大阪弁で言った。
—先生も描いたから——描いた。

—それやったら、ぼくとおんなじ早さで描いたわけか。
根元少年が小さくうなずいた。洋は根元少年の絵の横に自分のを置いた。そのときはもうクラスの三分の一くらいもの生徒が二人のまわりに立って集まってきていた。
—根元も、うみゃあが。
滝井少年の声だった。そしてつづけた。
—根元が描いたの、初めて見たで。
何人もがうなずいているのを、洋は見た。
—先生も、うみゃあが。
滝井少年が判定してくれた。ありがと……。洋はもう一度礼を言った。そこでベルが鳴った。絵がうしろから送られ集められ、それを揃えながら洋はさり気なく根元少年にたずねた。
—家へいってもいい？
根元少年の目がまんまるに見開かれた。口が小さくあけられ、乾いた唇を素早く舌先がなめ、かすれた声が口からもれた。
—ああ。
—今晩にでも……。
—ああ。けど……ほんときゃあ……。
あとのほうはつぶやくようにゆっくりと言った。

2

その日は三コマだけの授業だったが、始めたばかりの先生稼業だったせいか、洋はかなり疲れていた。しかし、根元少年との約束はちゃんと果たすつもりでいたから張り切っていた。二年E組の担任福田先生の最後の授業が終るのを、その教室を調べ、廊下で待っていた。いっしょにホームルームに出て、職員室へもどりがてらに、根元少年のことをきいてみた。鉛筆のことは話さずに、家のようすをきいてみた。福田先生はまったく知らないと答えた。担任して六日目だから、むろんまだ家庭訪問をしているわけもなく、知らないのもむりはないとも言えたが、春休みのクラス分けのとき話題にならなかったのだろうか。家庭調査簿をまだよく読んでいないのだろうか。ほかの先生のときは、一年生のときは、あんな奇妙な行動はとらなかったのだろうか。その一切を福田先生は知らないというのだろうか……。新米教師でもそのあたりまでは推察できた。

なにしろ五十三人も生徒がいるから、一人一人を知っていくのに時間がかかると福田先生は言い、それにしても二年生は楽でよい、入試就職には時間があるし、新入生のように手はかからないし——とも言った。そんな一般論でなくて、根元個人のことを言ってるのに、どうしてナゼかときき返してくれないのか——と、洋はいらだった。そこでいきなり、

—先生のかわりに——というのは失礼かもしれませんが、根元ンとこへたずねてはいけませんでしょうか。

ていねいにきいてみると、福田先生は、つんとかしこまり、

—家庭訪問の手伝いというわけですか。せめてもう少しクラスでの本人を見てからのほうがええと思とったが、ま、いってもらいますかな。

自分の代役、使いでといった言い方ながらも、意外とあっさり「許可」してくれた。そして机のひき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com